Good Job! Document

「福祉」と「仕事」の
これからの関係づくり

Vol.05

2015. December

Contents:

Good Job! Collaboration

File 09
一般財団法人 沖縄県セルプセンター × KIGI

File 10
社会福祉法人燕市社会福祉協議会就労支援センター × 企画製作室Bridge

The Modernology of Good Job!
／Keep Trying／Cheerers's Recommend

FIELD NOTES from Finland
／BOOK REVIEW｜SELECTOR: 家成俊勝

福祉、企業、NPO、自治体、研究機関など各分野の専門家が手を組み、新しい仕事をつくり出す「Good Job!」。『Good Job! Document』は、そういった「Good Job!」の思想・活動を広く伝えることを目的に生まれました。「Good Job!」から生まれたプロダクトを中心に、そこに込められた想いやプロセスを紹介。企画・製造・流通など商品開発に携わる、さまざまなプロフェッショナルの言葉を通して、これからの「仕事」「ものづくり」「福祉」のあり方、可能性について探ります。

photo: Kouda Masahiro

GoodJob! collaboration
異分野の協働から生まれるものづくり

File 09 琉Q “地域の資源とはたらきを取り入れる仕組み”

一般財団法人
沖縄県セルプセンター × クリエイティブユニット KIGI

http://www.okiselp.jp/　　http://www.ki-gi.com/

沖縄県産の素材を用いて商品開発・販売を行うブランド。デザイナーがパッケージを、セルプセンターが、地域の職人との協働と、障害のある人たちへの作業分担などのコーディネートを手がけています。

photo: Yoshihito Tomii

▲「塩パインバター」「海水塩」「ウコン」「島胡椒」「練り島唐辛子」「アセローラ」といった沖縄県産の食材を販売。ガラス瓶ややちむん（陶器）など、地元の職人の手を入れたプロダクトもあります。

セルプセンターとデザイナーのコラボレーション！

萱原さん、渡邉さん、植原さん、どうやって実現したんですか？

沖縄県セルプセンター
萱原景子さん
運営統括責任者

KIGI
渡邉良重さん　植原亮輔さん
アートディレクター

Q1 本プロジェクトをはじめたきっかけについて聞かせてください。

萱原：施設での収入だけでは生活できない人がほとんどという状況を改善すべく、商品力を上げることでの工賃アップを目的に、お祭りやイベントで施設商品を販売したことがはじまりでした。ただ商品づくりに関しては素人ということで、広告会社に依頼して、今後の展開を一緒に考えてもらうことになりました。そこで、各々の施設が商品開発・販売するのではなく、“ブランドを立ち上げ、発生する作業を複数の施設にお願いする”というアイデアが生まれました。琉Qは、沖縄の素材、製法にこだわり、良いものであることを大事にし、商品の製造は企業に、一部作業を施設にお願いしています。デザインを担当してくださったKIGIとは面識はありませんでしたが、これまで手がけられた商品を拝見して、「ぴったりはまりそう！」と思い、依頼することになりました。

Q2 プロジェクトを進める上で、意識したことやこだわりなどはありますか？

KIGI：今回のプロジェクトでは、“沖縄の知恵と恵み”に着目してQ&Aで商品を紹介しながら開発したため、“良さ”をどう引き出すかが、重要なポイントになりました。これまでの沖縄みやげは、少し主張が強く、にぎやかなデザインが多い印象があります。ただ実際は健康的でクオリティの高いものが多いため、パッケージデザインが主張しすぎる必要はないと考えました。ただ、きちんとブランド色が出ていることは重要です。そこで、琉Qでは、シンプルで、凛として、品のある“良品”であることを感じさせるようなデザインを心がけています。また沖縄自体も紹介したいと考え、定番のウコンや塩から、ガラス瓶ややちむん（陶器）へと商品を展開していきました。WEBサイトでは、“Q&A”で、商品が生まれた背景にもつながる沖縄の魅力を伝える企画をしています。

Q3 今後の展開や期待していることについて、お聞かせください。

萱原：人気のある商品は、生産が追いつかないほどの勢いです。この成功モデルが、もっと社会でも広がり、一人でも多くの障害のある人たちの工賃アップにつながってほしいと期待しています。今後も、時代にマッチした商品を、広告会社やクリエイターのみなさんと連携して発信することを通して、一人ひとりに「障害があってもなくても同じ人間同士なのだ」という心が芽生えれば嬉しいです。

TOPICS

100％沖縄生まれのものにこだわる！

琉Qブランドの根底にある絶対に外せない想い、それは「沖縄のものにこだわる」ということ。メイン素材となる食材はもちろんのこと、パッケージに用いる工芸品や、関わる企業、作業をお願いしている就労支援事業所に至るまで、すべてがメイドイン沖縄です。

それぞれの商品を、それぞれの福祉事業所で。

ラベル貼りや瓶の管理、配達などの業務をさまざまな就労支援事業所に依頼。“より多くの方がこの事業に関わることで、工賃として還元したい！”という思いから、それぞれの商品の産地や加工所に近い就労支援事業所に業務を発注することを大切にしています。

観光の島・沖縄の日常をお届けするWEBサイト！

琉QのWEBサイトには、本土の人が思う100近くの沖縄への疑問に、沖縄に暮らす人たちが答える「琉Q&A」があります。観光では感じ取ることのできない沖縄人の日常の暮らしを通して、“沖縄の良いもの”を形にしたブランドの本質を伝えています。www.ruq.jp

沖縄県セルプセンター [創立:1984年　拠点:沖縄県那覇市]
沖縄県内の障害者就労施設などで、自立をめざして働く障害者が生産した商品の販売を支援する団体です。

KIGI [創立:2012年　拠点:東京都渋谷区]
渡邉良重と植原亮輔によるクリエイティブユニット。木の象徴としてのクリエイティブを丁寧に育て、森にしたいという理念のもと活動しています。

GoodJob! collaboration
異分野の協働から生まれるものづくり

File 10 つばめキャンドル “原材料の有効活用と協働の仕組み”

社会福祉法人
燕市社会福祉協議会就労支援センター × 企画製作室 Bridge

http://tbm-swc.jp/　　http://www.sumikkobridge.com/

新潟県・燕市の福祉事業所とプランナー、地場産業や観光が協働し、結婚式にて使われたキャンドルから商品開発を行う、つばめキャンドル。“幸せの連鎖”をテーマに、さまざまな形・色の商品、ワークショップなどが生まれています。

▲「つのキャン」「おにキャン」シリーズをはじめ、「こびとキャンドル」「ツリーキャンドル」や季節のパッケージ商品など、サイズ・形もさまざまで商品展開のバリエーションも豊かです。

福祉施設とプランナーのコラボレーション！

土田さん、小林さん、どうやって実現したんですか？

Q1 本プロジェクトをはじめたきっかけについて聞かせてください。

小林：2013年春に、新潟県から業務を受託した「新潟県魅力ある商品づくり事業」での取り組みをまとめた冊子『授産品読本』がきっかけでした。冊子を見た職員さんから「商品開発を計画しているのだけど、なにか一緒にできないでしょうか？」とご相談いただき、プロジェクトがスタート。模索しながら、材料が入手しやすく、燕市の地場産業や観光とともに協働できるキャンドル製品からはじめました。

Q2 プロジェクトを進める上で、意識したことやこだわりなどはありますか？

小林：“ひとに喜んでもらえる、喜ばせる力のある商品”であることです。つばめキャンドルは、結婚式で使用されたキャンドルを材料に、再び手間をかけて商品化しています。“喜び”の連鎖をつなげる意識、誰かの幸せを願って製作できる環境は大切です。また、“現場でできる方法を構築すること”を重視し、施設を中心とした体制づくりを心がけています。
土田：私たちだけで難しい部分は、小林さんをはじめ、各分野のプロに協力を仰ぎ、協働してきました。仕事づくりとしては、単につくって売るだけでなく、多様な体験を積み重ね、社会とつながり、やりがいと誇りをもつことを重視しています。また、“幸せのおすそ分け”にこだわった物語のある商品なので、魅力が伝わる情報発信にも力を入れています。

燕市 社会福祉協議会就労支援センター
土田貴子さん
生活支援員

企画製作室 Bridge
小林あかねさん
代表

Q3 今後の展開や期待していることについて、お聞かせください。

土田：新しいことへのチャレンジは、リスクや失敗を考え躊躇しがちです。でも、「やるしかない」と覚悟を決めて取り組めば、少しずつ前に進むことを実感しました。今後は、規格化した“美しい”商品以外にも、スタッフの個性が表れる“おもしろい”商品を展開するなどつばめキャンドルを“続けていくこと”を大切にしたいと思っています。
小林：“幸せな時間を過ごすときに最適なキャンドル”として、人を喜ばせ、社会に必要とされるチームであり続けたいと思います。そのためにも、よりよいデザインの追求やシステムの構築を含め、ブランド力を高めていきたいですね。また協働の良さは、それぞれのネットワークを通して広く伝えることができること。支援する・されるという関係ではなく、常に対等にお互いが刺激し合い高め合えるパートナーであることを大切にしていきたいと考えています。

TOPICS

「つばめ」という名に込めた想い。

由来は、拠点である新潟県燕市の地名。「地域」という漠然とした括りのなかで働く障害のある人たちの「ここ（燕）にいるよ」という声を代弁しています。燕市で長年培われた地場産業、金工技術を生かし、キャンドルの型は地元企業の協力のもと特注で制作しています。

社会で必要とされる人材が育つ環境！

事業所の目標は、“一般企業への就労”へとつなげること。キャンドルづくりには、ともに働く人々と力を合わせ、工夫することが求められます。その経験を通して、単に「ものをつくる」だけではなく、社会に必要とされる人材が育つ環境を整えています。

キャンドルづくりで、地域とつながる！

学校行事や地域のお祭りなどで、キャンドルづくりのワークショップを実施。障害のあるスタッフには、「接客が苦手！」という人もいますが、お客さまと触れ合い、社会と関わるチャンスを生みつづけることが、個々の可能性や視野を広げるきっかけとなっています。

燕市社会福祉協議会就労支援センター [創立：2009年　拠点：新潟県燕市]
燕市社会福祉協議会は地域福祉を推進する団体として、社会福祉法の中に位置づけられた公共性の高い民間の福祉団体です。

企画製作室 Bridge [創立：2014年　拠点：新潟県新潟市]
必ず誰かの心強い存在となる「すみっこ」にあるモノやコト。それらがもつ力を引き出し、価値を再認識する仕掛けをつくる仕事をしています。

The Modernology of Good Job!

リサーチ・文：津田和俊 [Fablab Kitakagaya]　絵：望月梨絵 [Fablab Kitakagaya]

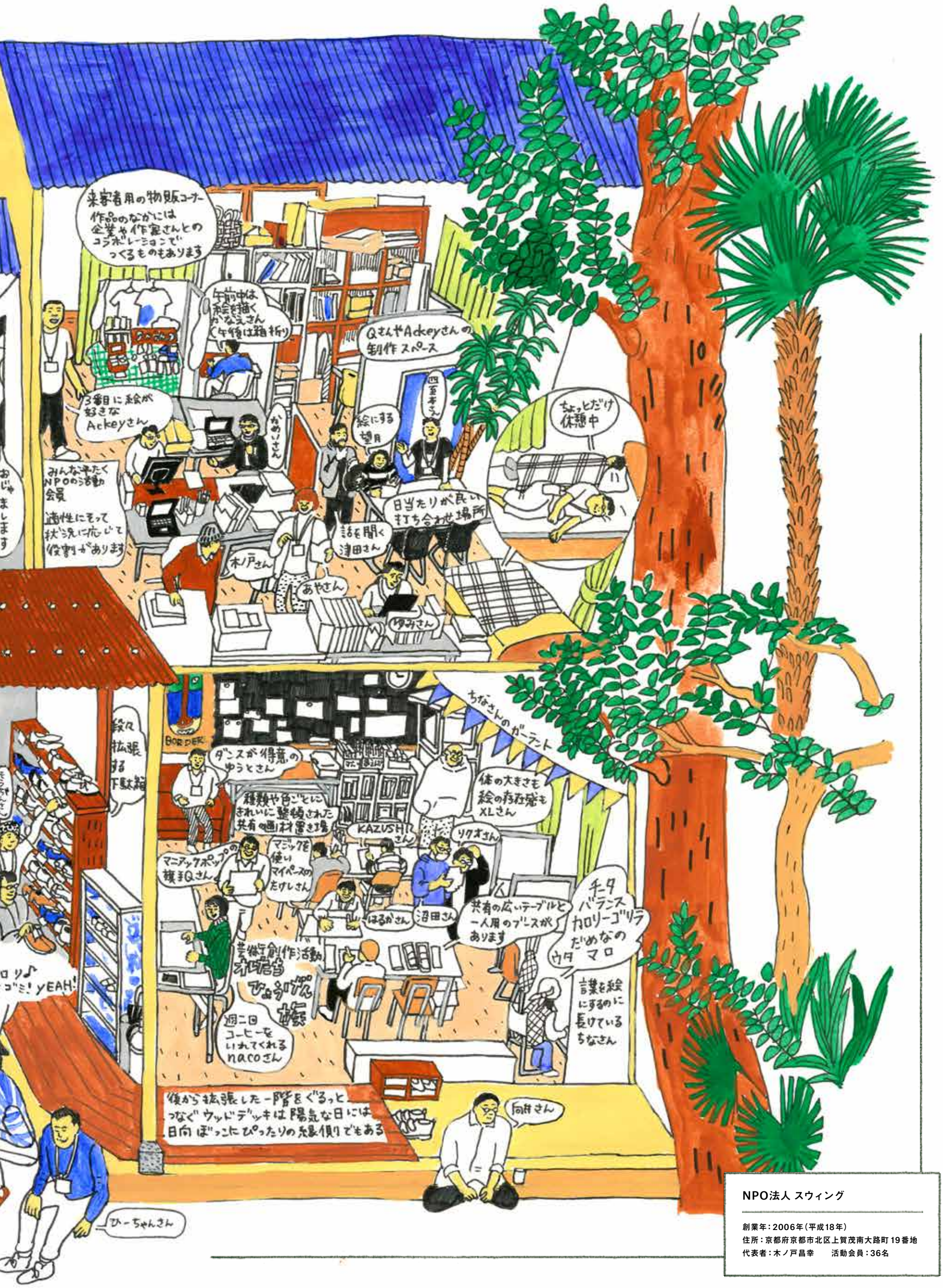
Good Job!な活動を展開する、京都のNPO法人スウィング。
「The Modernology of Good Job! - Good Job! 考現学 -」と題し、
<若手研究者の視点×考現学の方法論>で観察し、ひも解きました。

京都・上賀茂神社の社家の町並みのなか、「Enjoy! Open!! Swing!!! (楽しむこと・開くこと・揺れること。スウィングの理念。)」と書いてあるブルーの三角看板を目印に、敷居のない入口をくぐり抜けると、その木造2階建ての建物はある。もともと学習塾だった名残ですべての部屋には黒板があり、部屋ごとに掃除当番表や活動分担表などが掲示されている。

スウィングの活動は主に4つ。1つ目、「THE CLEANGERS (ザ・クレンジャーズ)」は、京都市内のお寺や公共施設などの清掃活動。2つ目の「shiki OLIOLI」では、京都銘菓の紙器の組み立て(箱折り)や、生地屋で販売する布の端切れの折りたたみ。3つ目の芸術創作活動「オレたちひょうげん族」は、絵・詩の制作や展示、オリジナルグッズの製作・販売。そして、4つ目「OYSS (オイッス)!」では、ブルーの戦隊ヒーローに扮して行う清掃活動「ゴミコロリ」や寸劇、「京都人力交通案内」などを展開している。

NPO法人であるのは、全員が平たく活動会員となって、「一市民」として活動するため。人は一人ひとり同じではないし、生き方もひとつではない。「(障害のあるなしを超えて、人は)違って当たり前とするのが目的」とは施設長の木ノ戸さん。それぞれ役割を持って、あそび・しごと・くらしの3つを楽しんで繰り広げられる普通の日常は、その場がまるで観客を入れた公開コントのセットにでもなったように風通しが良くおもしろい。

「モノ(商品)やそのモノがつくられる状況、ストーリーに加えて、さまざまな活動を通した内面の変化にも焦点を当てたい」と木ノ戸さん。例えば、元・引きこもりで「知らん」が口癖だったXLさんが、おどけた「知らんわ!」で周りを笑わせている。肩肘張ったフルスイングではない、そんな一振りがあちこちに普通にある日常が「真面目な福祉」の現場である。(文：津田和俊)



NPO法人 スウィング

創業年：2006年（平成18年）
住所：京都府京都市北区上賀茂南大路町19番地
代表者：木ノ戸昌幸　　活動会員：36名

Good Job! にひそむ試行錯誤の裏側

keep trying...

これまで『Good Job! Document』では、Good Job!な商品や取り組みの数々を紹介してきました。その裏側では、たくさんの課題とぶつかっては悩み、話し合って分析し、挑戦してゆく過程があります。「Keep Trying」では、そんなプロセスを紹介していきます。

奈良県香芝市に2016年竣工し、福祉としごとを考える

Good Job! センター の場合 ＞ はじまり ＜

スタッフ・藤井さんには、こんな悩みが……

障害のある人が手仕事と創造性をいかし働くには…

Good Job! センター

オープン：2016年8月予定
住所：北側建物　奈良県香芝市下田西2丁目441-1,2,13
南側建物　奈良県香芝市下田西2丁目393-5, 441-9,10,11
運営主体：社会福祉法人わたぼうしの会
敷地面積：703.81㎡＋795.51㎡　助成：日本財団

TOMORROW IS TODAYとは……

デザイナー（原田祐馬・吉行良平）と障害のある人による商品開発。だれもが扱いやすい素材でワークショップを実施。ゆるやかなルールのもと、生まれる表現からつくり方・はたらき方を探る。

TOMORROW × IS TODAY

Good Job! センター開設準備室スタッフ・藤井さんが考える

障害のある人のものづくりの可能性

Good Job! センターは2016年8月のオープンをめざし、そこで展開される障害のある人の仕事を模索中です。これまでにも、絵画作品の販売、商品のデザインに作品をいかした先例は多数あり、障害のある人が作家として活躍する機会が広がりつつあります。一方、自由に自分を表現し、創造することは苦手でも、選択肢のなかでアレンジ力を発揮する人、手仕事が精神的な安定につながる人など、多様な可能性を持った人たちがいます。このような人たちがデザイナーとなり、自分の手で実感を持って商品を生み出すこと。そこに可能性を感じています。

2015

STEP 01

関西を拠点とするデザイナーと商品開発・しごとづくりに挑戦

Good Job! センター 開設準備室
社会福祉法人わたぼうしの会

＋

デザイナー
原田祐馬

コラボレーション

プロダクトデザイナー
吉行良平

藤井克英（Good Job! センター開設準備室）

「商品は量産すべし」という福祉の固定概念から、手仕事による限定供給の価値を考えるように。

STEP 02

奈良にある地場産業の現場へと向かい、素材や道具、廃材などをリサーチ！

吉野材の加工
喜多製材所

建築資材の製材のほか、吉野材＝スギやヒノキ、クスノキなどの木材からのアロマオイル抽出、枕やまな板といった生活雑貨の製造もされています。今回は、使われている機材や端材などに着目し、素材を吟味。

野球グローブの製造
株式会社ATOMS

グローブの製造現場には、熟練の技術がありました。革の種類や形状、カラーバリエーションも豊富で、それぞれの性質を熟知した職人さんが製造を担当。製造実演もしていただき、革の奥深さを目の当たりに。

藤村和成（Good Job! センター開設準備室）

ものづくりの現場には奥深い知識や素材、そして奈良発の「ここぞ！」という熟練の技術がありました。

ほかにも、こんなところを訪ねました。

- 梅乃宿酒造株式会社
- 仲内株式会社
- 富士トンボ礦業株式会社
- 有限会社原田刺繍
- ナテック株式会社
- 株式会社丸商店

デザイナー・原田さんが考える

デザインの可能性

「TOMORROW IS TODAY」は、デザイナーと障害のある人が協働し、明日の生活と未来のしごとをつくり出す小さなブランドです。今回、Good Job! センターが建てられる奈良という地域の素材や加工方法を実際に見て回りました。障害のある人がつくり手として、商品の最終デザインを決定することを大切に考え、その制作プロセスや枠組み、商品ラインアップの幅を、デザイナーとしてどう設計できるかがポイントでした。このプロジェクトを通して見えてきたことは、ある程度限られた素材や技法のなか、自ら考え手を動かし進めていった結果、得た経験や成果をその場で共有、更新していくことで、素早いバージョンアップが可能になるということです。単に数を多くつくる、制作の効率を上げるだけではなく、“考えるルーティンワーク”を仕組み化することで、製品の質を高め、つくり手同士が互いに評価し合うものづくりの関係性を育むのではないでしょうか。

STEP 03

メーカー訪問を踏まえて、商品開発のためのワークショップを実施

01

7/31

喜多製材所提供の吉野材加工体験

デザイナーと福祉施設メンバーが参加、初顔合わせ。みなが同じ空間で和紙を切り、木材を磨くうち、だんだんと個々のデザインやパターンが表れ、最後にはその人らしさのにじむ部材が生まれていました。

02

8/24

商品を生み出すための調整

初回WSの内容をふまえ、主要メンバーで意見交換。それぞれの創造性をいかしつつ「BOOK END」となる部材に装飾できるパーツの個数を制限、ルール化。ものの魅力のエッセンスと効率の塩梅を探りました。

03

8/26

作業プロセスをテストしてみる

部材の制限がどんな効果を生むか、実際に吉野ヒノキの樹皮側に和紙を貼ってデコレーションしてみる。シンプルながらものから個人の色が見えてくるデザインに。金属パーツを取り付け、「BOOK END」完成！

STEP 04

「BOOK END」サンプルを見本市に出展

FOR STOCKISTS EXHIBITION 2015（東京・池袋）

お客さんが「仕上げ」としての和紙の装飾を見ながら、実際に手にとって使う場所を考え、好みの絵柄を探す様子が印象的。手仕事によって生まれる色や形、想像しうる用途と、購入者の要望がうまく重なり合ったのだと感じました。

吉行良平（プロダクトデザイナー）

プロダクトデザイナー・吉行さんが考える

手しごとの可能性

個々が好んで選ぶ素材や色、かたちがどのようにほかの人へと届き、感じとられるのか。いま、進めている作業の一つひとつが、商品を手に取った人たちへどのように伝わり、受け入れられるのか。「TOMORROW IS TODAY」では、つくり手がだれかを思い、考えた工夫、経験を通して生まれるものづくりに挑戦しています。人それぞれがそれぞれの身体や個性をもつように、手を動かす制作者が自分たちの方法で、商品が手に取られるその先のことを想像し、積み重ねる作業がもののクオリティへとつながっていく。この先も、彼らとともに手を動かし検証を続けながら、“しごと”とは、“はたらく”とは何かを探求していきたいと思います。

STEP 05

商品開発を進めることで見えてきた、デザイナー×福祉施設の新しいものづくり

―― ワークショップを終えて、それぞれが考える、今後の展望を聞かせてください。

原田：今回、使い手の用途やシーンを想像しながら形づくるという、ものづくり本来の自然なプロセスを大事にしました。

藤井：そうやって、障害のある人が創造性を働かせ、商品の設計から関わる機会は、これまで少なかったんです。その状況を少しずつ変えていけそうな予感がありますね。

吉行：また、“手を動かす会議”の可能性も見えてきました。言葉ではなく、線や色を交えた対話を通して、デザイナーと障害のある人の間にある垣根をなくしていく。

原田：双方の“役割を超えて関われる場”を維持しつつ、それを意識的にものづくりの工程へ組み込んでいくこと。今後も実験と検証を繰り返し、進めていきたいですね。

Good Job! センターでは、“障害のある人の個性×デジタル工作機械”の、ハイブリッドなものづくりを展開する予定です。障害のある人の作業を機械がサポートすることで、製品の質を保ち、ものづくりの可能性をひろげられます。

竹田周平（Good Job! センター・ファブスペースアドバイザー）

Good Job! センター開設準備室
藤井克英さん
1980年生まれ。2002年よりたんぽぽの家で商品開発に携わる。現在、Good Job! センター開設準備室スタッフとして活動。

デザイナー
原田祐馬さん
1979年生まれ。UMA/design farm代表、デザイナー/ディレクター。Good Job! センター・アドバイザーを務める。

プロダクトデザイナー
吉行良平さん
1981年生まれ。オランダ留学後、「吉行良平と仕事」設立。国内外のクライアントと商品開発やプロジェクトを行う。

CHEERERS's RECOMMEND

2015年度より生まれたGood Job!の後援人・Cheerers。
彼らがピックアップしたプロジェクトの一部を紹介します。

1 ココ・ファーム・ワイナリー

／こころみ学園［栃木］

こころみ学園　［設立:1980年 拠点:栃木県］
特殊学級の中学生たちとその担任教師が開墾した山間の葡萄畑、そのふもとに設立された指定障害者支援施設。農作業やワイン醸造場での仕込みやビン詰め作業に園生が取り組んでいます。

世界のVIPを唸らせる丹念なワインづくり！

2000年に開催された九州沖縄サミットの晩餐会に使用されたことで著名になったココ・ファーム・ワイナリーのワイン。障害がある人たちが中心になって、1950年代の開墾以来、除草剤を散布することなく、栽培を行っています。野生酵母（天然の自生酵母）を用いるなど、手仕事をいとわず、本物のワインをつくる製造方法にも注目！

CHEERER
株式会社リ・パブリック
アシスタントディレクター
原田恵さん

2 オーラルピース

／株式会社トライフ［神奈川］

オーラルピース　［設立:2013年 拠点:神奈川県］
世界最先端の乳酸菌の研究とバイオテクノロジー技術で生まれた、化学合成成分フリーの口腔ケア製品。誤飲・誤嚥の心配のある方でも安心して使用できます。

天然原料100%のこだわり、ビジネスモデルも魅力的！

水と植物由来原料からつくられており、誤飲しても安心という革新的な口腔ケア製品・オーラルピース。発送や販売には障害者が関わるなど、障害者の仕事も創出しています。すでに一般市場で高い評価を得ている商品を、障害者施設が「売る」というこれまでにはないビジネスモデルで、施設が投資せずに事業をはじめることができる点も魅力的です。

CHEERER
季刊誌『コトノネ』
発行人/編集長
里見喜久夫さん

3 クレッシェンド

／認定NPO法人D×P［大阪］

認定NPO法人D×P（ディービー）　［設立:2010年 拠点:大阪府］
高校生が進路未定のまま卒業することや、学校を中退することを防ぐための取り組みを行うNPO。キャリア教育を中心とした、さまざまなプログラムを実施しています。

若者一人ひとりが、未来に希望を持てる社会を！

現在約60万人とも言われるニートの問題に取り組む 認定NPO法人D×Pによるキャリア教育プログラム「クレッシェンド」。ニートが生まれる原因は「機会の格差」にあると捉え、通信高校生を対象に、3ヶ月間のプログラムを実施しています。高校生がさまざまな「機会」を通して、自分の人生と向き合い、幅広い選択肢の獲得を実現しています。

CHEERER
有限会社奥進システム
代表取締役
奥脇学さん

4 Beogo Duni

／Beogo Duni［ブルキナファソ］

Beogo Duni　［設立:2012年 拠点:koupéla（クーペラ）］
青年海外協力隊員が、地域の生産者とともに立ち上げた組織。バッグの製造を通して、社会的な廃棄物問題を解決するだけでなく、障害のある人々の雇用を創出しています。

廃棄物問題と向き合う、「明日の地球（Beogo Duni）」。

西アフリカ・ブルキナファソでペットボトルの代わりとして急速に導入された水を入れる袋。現在はゴミとなり、社会的な廃棄物問題になっています。それらを洗浄・リサイクルすることで生まれたBeogo Duniのバッグ。スタッフの半数以上がウイルス感染症・ポリオなどの身体障害をもち、農業に従事できない人々で構成され、新たな仕事となっています。

CHEERER
Love&sense 代表
高津玉枝さん

5 合同会社 竹内農園

／合同会社 竹内農園［北海道］

島松の竹内農園 農と福祉の融合始動
精神障害者が野菜作り
就労訓練兼ね「1人じゃない」

合同会社 竹内農園　［設立:2013年 拠点:北海道］
特別栽培という、化学肥料・農薬を半分以下に抑えた栽培方法に挑戦する農園。福祉事業所のサンスマイルと提携しながら、障害のある方とともに農業に取り組んでいます。

「農福連携」モデルで、新しい農業のかたちを模索！

おいしいものづくりと並行して農業と福祉の融合をめざす合同会社 竹内農園。野菜づくりのみならず、障害のある方への雇用もめざしており、農業へ新規参入する人への支援など、幅広い活動を展開しています。これからますます期待されている、北海道における「農福連携」モデルの草分け的存在として、そのチャレンジングな姿勢に注目が集まっています。

CHEERER
一般社団法人北海道チャレンジドアート＆プロダクツ
小野尚弘さん

6 Too Patch

／被災地障がい者支援センター 交流サロンしんせい［福島］

被災地障がい者支援センター 交流サロンしんせい
［設立:2011年　拠点:福島県］
東日本大震災後、「福島県の障がい者のパワーで、福島県を新生していこう」という想いで開設された被災地障がい者交流サロン。

“職人”として仕事をし、賃金体制を設計する！

「障害者がつくるもの＝質やデザインはイマイチで安価、購買の主な動機はチャリティ」という既成概念を払拭するためのデザインプロダクト。“1点もの”という付加価値により、既存のデザインプロダクトと同等の価格で販売。そうすることで、一般的な水準の工賃をめざしています。またどの作業所でも同じ規格の商品がつくれる仕組みづくりも検討中です。

CHEERER
AXISギャラリーキュレーター
佐野恵子さん

FIELD NOTES

Good Job! な活動と出会い、感じ考えたことをつづる

from Finland

仕組みからはじめる、フィンランドの福祉デザイン

執筆
浅野翔 デザインリサーチャー
名古屋を拠点にフリーランスとして活動。Good Job! 2014にて、「愛知県で伝統工芸のなかに障害のある人がはたらく場所をつくる」プロジェクトディレクターを務める。

2015年10月22日から25日、フィンランドのアールト大学デザインファクトリー、ヘルシンキ市内の文化センターで開催された“Practices Between Life and Work（邦題：障害者福祉の現場から生まれるもの・こと・生活）”。私は、障害者福祉に携わるメンバーと「障害を持つ人の働き方と暮らし方から生まれるもの」に着目した展示を行いました。

障害がある人とともに制作した作品や商品には、さまざまな反応がありました。なかでも印象的だったのが、アールト大学で共創（Co-Creation）を研究するデザイナーの友人からの問いかけ。それは、「これらの素晴らしい展示物は、障害のある人とデザイナーがどのように協働して生まれたのか、それが日本の政策とどう結びついているのか」という、まさに“仕組みのデザイン”に対する質問でした。

この質問の背景には、フィンランドで肥大化する社会保障費を、どう捻出していくのかという課題が伺い知ることができます。かねてからフィンランドでは、障害者支援について、“年金の拡充”だけではなく、“労働環境の創出”と統合して考えるべきだという意向がありました。福祉施設がものづくりを行うこと、それに関わる仕組みを、経営的な視点はもちろん、政策的な視点からも捉え、最大化するという意識も強いようです。近年では、それらを円滑につなぐサービスのデザインが求められています。

アールト大学デザインファクトリーでの展示の様子
OTSU http://otsu-project.com

問いかけをしてくれた彼自身も、ヘルシンキ市社会福祉局とのプロジェクトで、知的障害がある人とその家族が生活のなかで抱える課題調査に携わっています。そこで気づいたことは、その課題の多くは、既存の福祉サービスを組み合わせることで解決できるということでした。現在は、行政によるサービスの統合、より利用しやすいアプリやメディアのデザインに取り組んでいるそうです。

NPO法人リュフトゥ（Lyhty）で制作に取り組む作家と作品

現場の声を大切にしながら、仕組みの再整備と効率化からはじめるフィンランドでは、日本の施設でつくられる作品や商品の質に対して、賞賛の声が上がりました。一方、現場で奮闘する日本では、充実するフィンランドの福祉サービスに羨望の眼差しを向けています。互いに異なる状況での取り組みから、次の段階へのヒントを得られる期待が感じられた滞在になりました。

BOOK REVIEW

これからの福祉や仕事を考える3冊

SELECTOR

家成俊勝
［建築家］

01

『「聴く」ことの力 ― 臨床哲学試論』

著者：鷲田清一
発行：阪急コミュニケーションズ/1999年

私は無口な高校生だったが、大学では少しおしゃべりになった。その後この本に出会い、大切なのは声を聴くこと、声にならない声を聴くこと、存在を受け入れることだと知った。

02

『猫楠 ― 南方熊楠の生涯』

著者：水木しげる
発行：角川文庫ソフィア/1996年

人間中心にものごとを考えてきたが、世界は当然人だけでできていない。森、粘菌、動物、幽霊、海。それらが同時に存在していることの素晴らしさと豊かさが表現されている。

03

『ジェントリフィケーションと報復都市』

著者：ニール・スミス　翻訳：原口剛
発行：ミネルヴァ書房/2014年

さまざまな人が暮らす都市。そこに、いつ追い出されるかわからない人たちがいる。都市の力学によって場への愛を奪われること。人がそこに居てはいけない理由があるだろうか。

3冊の本を選んだ理由

私たちはどこで暮らしていても、その場所と深く関係を結んでいます。現在、それらの場所は区切られてすべて誰かの持ち物になってしまっていますが、それらは物理的にもつながっていて、すべてのほかの場所との関係で成り立っています。そして私たちが暮らす日常は、大地や山や海に生きるさまざまな生物が織り成す世界と、民話や昔話の想像力がもたらす世界が絡みあっています。それらはさまざまな調整と連帯と争いを繰り返しながら常に変容し、境界を横断し続ける場だと思います。大事なのはその人がそこに居ること、その生物がそこに居ていいんだと思うことです。雨が降ってきたら、すぐに傘をささずに、雨音に耳を傾けるゆとりが欲しいですね。

家成俊勝／1974年兵庫県生まれ。2004年、赤代武志とともにdot architectsを共同設立。大阪・北加賀屋を拠点に活動。京都造形芸術大学空間演出デザイン学科特任准教授。

MESSAGE

森下静香（Good Job! プロジェクト／一般財団法人たんぽぽの家）

今年からはじまった公募プログラムGood Job! Award。障害のある人の可能性をいかした創造的なしごと、先駆的・革新的・実験的な取り組みを募集したところ、うれしいことに国内外から118件の応募がありました！ 10月の審査会では、審査員のみなさんとともに、あまりにも多様な活動や取り組みの数々に、あらためて新しいことが各地ではじまっているのだと実感しました。入選した12の取り組みに共通していたのは、やはり「既存の価値観を変えるようなアイデアや感性」です。最初は1人の想いとか情熱とか、時には思い込みのようなものからスタートして、いろんな創意工夫や実験をしながら協働する相手をみつけ、共感やネットワークが広がっている、そんな印象を受けました。12月からはじまるGood Job! 展では、Award入選展と企画展「未来をつくる挑戦」が宮城、東京、大阪、そしてGood Job! としてはじめて大分を巡回します。12月20日（日）の13:00からは東京会場にて公開の最終プレゼンテーションも行います。どうぞお楽しみに、ご来場ください！

【Good Job! Document 05】 発行日：2015年12月11日　発行元：一般財団法人たんぽぽの家　〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4　Tel 0742-43-7055　Fax 0742-49-5501　E-mail goodjob@popo.or.jp　URL http://www.goodjobproject.com/　監修：Good Job!プロジェクト
編集ディレクション＆編集：多田智美、永江大（MUESUM）　アートディレクション＆デザイン：原田祐馬（UMA/design farm）　デザイン：西野亮介（UMA/design farm）　印刷・製本：株式会社シーズクリエイト　＊本フリーペーパーは、下記の展覧会開催に際し発行されました。
「Good Job! 展 2015-2016」 主催：一般財団法人たんぽぽの家／後援：宮城県、大分県、仙台市、大分市／助成：日本財団／特別協賛：株式会社丹青社、トヨタ自動車株式会社／協賛：株式会社ソフィア、株式会社西山ケミックス、株式会社ハーバー研究所、株式会社プリプレス・センター、コクヨ株式会社、明治安田生命保険相互会社／協力：渋谷ヒカリエ、一般社団法人北海道チャレンジドアート＆プロダクツ、NPO法人エイブル・アート・ジャパン、NPO法人まる

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION　株式会社丹青社　TOYOTA　Sophia　かばきち　HABA　株式会社プリプレス・センター　KOKUYO　明治安田生命